



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	特集「歴史的トラウマから展望するアイヌ・先住民研究」序論：アイヌ／和人への手紙
Author(s)	北原, モコットウナシ
Citation	アイヌ・先住民研究, 1, 3-5
Issue Date	2021-03-01
DOI	https://doi.org/10.14943/97139
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80883
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_Introduction.pdf



特集「歴史的トラウマから展望する アイヌ・先住民研究」序論 ——アイヌ／和人への手紙——

北 原 モコットウナシ

「アイヌである自分をよく思えない」「アイヌに良いイメージを持ってない」「アイヌについて聞いたり考えたりすると気が重い」。しかし「特に理由は思い当たらない」という方には、ぜひ本特集を読んでいただきたい。

2019年のアイヌ施策推進法や、2020年の民族共生象徴空間開設と前後して、アイヌ民族をめぐる言論が再び活発になっている。アイヌの内から発せられる声や「アイヌのために」なされる主張に限っても、発言のポジションや内容はじつに多様だ。アイヌ民族や、その支援者を自認する人々にも様々な立場があり「アイヌはこう考える」だとか「アイヌとともに行動する」等といった、単純な論じ方には限界がある。そのことが改めて浮き彫りになっている。

筆者の知る限り、現行の政策のあり方について、すべてを肯定する／否定するという意見はまれである。意見の違いは「誰がアイヌを代表するか」ということを除けば、権利保障や文化振興、教育の推進などについてのニーズやイメージの違い、どれをどのような形で優先して行うか、という点に現れている。根本的な意見の食い違いがあるように見えても、一方向の主張ではなく組織や立場を超えた対話の機会が増えれば、要望のすり合わせや課題の共有は可能だろう。

こうした多様な考え・指向がありつつも、そこには共通するものがあると感じる。それは、自分が／親しい人が、アイヌをそのまま肯定できない、といったことではないだろうか。アイヌは前に進むべき、あるいは昔に戻るべきなど、意見は様々あるにせよ、今のままでは良くないと語る人は多い。実はこうした声は戦前からあり、長く課題となってきた。しかし、まずは自己を肯定できれば、動き出すこともできない。そのための研究を紹介できないか。これが本特集を企画した意図である。アイヌのための特集でありつつも、アイヌに共感する隣人にとっても有益となるものを目指した。

「アイヌ研究」に良い印象を持たないアイヌは決して少なくないだろう。博物館で働き、あるいは大学で講師等につくなど、アイヌ自身が研究・教育に携わるケースは増えている。また、研究助成を得て研究活動や出版をする、シンポジウムに登壇するなど何らかの形で共同研究に参加する機会も増えており、ここでは研究行為そのものが即座に否定されるわけではない。

しかし「研究」という言葉は「教養」と似て、ある種の敷居の高さがある。どんな領域でも、興味のある人には楽しく、そうでない人には無縁のものだが、研究にアクセスする人とならない人の間

には、どこか距離ができてしまう。さらに、学問の世界に閉じこもってアイヌが直面する現実の問題には無関心を決め込むとか、自らを高みに位置づけ対等な対話をしない研究者もあり、アイヌにとっての意義をまるで考えない研究があるのも確かである。好意的に見られないのも当然といえる¹。

また「アイヌのことをしている／していない」という言い方もある（よく考えればおかしい表現だが）。これは多くの場合、いわゆる伝統的な工芸や芸能、アイヌ語の習得や復興活動に関わっているかどうかを指している。「日本文化を学ぶ」というと華道や茶道、邦楽などを学ぶことが頭に浮かび、エレキギターやヨガは含まれないのと同じともいえる。しかし、そのような意味で「日本文化」を学んでいなくとも、今日ではむしろそれが普通であって、和人としての資格を問われるようなことはない。

ところが、アイヌが「自分は何もしていない／文化には興味がない」というときには、どこかにうしろめたさが漂うことがある。文化に触れた経験がないことを理由に、自らを「アイヌだとは言えない／言ってよいのかわからない」という人も珍しくない。少数者は、ひとたび名乗りを上げると、二者択一的に帰属意識の強さや資格を周囲から問われ続ける。アイヌについて言えば「日本国籍でありアイヌ」というアイデンティティは認められず、伝統的なものを保持していなければ、アイヌとして生きることを放棄したかのように見られもする。そのために「何もしていない」自分は「アイヌと名乗ってよいのか」と感じるまでになる。研究者もこうした風潮の問題を見過ごしてきた面があるし、自身の研究を基準に文化活動の「正しさ」を判定したり、文化活動に関心を示さない者に対しては「伝統の大切さがわかっていない」等と冷笑的にふるまったりすることさえある。こう考えると、これまでの研究にはやはり権威的なところがあり、研究の動向が、無自覚のうちに「アイヌらしさ」を決めてしまっているところもある。

ただ、研究を和人だけのものとするのも早計である。研究につながる関心は多かれ少なかれ誰もが持っているものであり、既存の研究と距離を取りつつも、自身のニーズに合った部分は取り込むとか、積極的に関与して自身の求める研究に近づけるとか、そういう付き合い方もある。今日の研究には様々なテーマやスタンスがあり、意外な着眼点に驚かされるものも少なくない。ふだん当たり前に感じて過ごしていることを、改めて説明し、あるいは見方を大きく変えるものもある。例えば『薄毛』や『多毛』は恥ずかしいとか、月経は「避ける・隠すべきもの」とする感覚、あるいは性愛のあり方や日常のふとしたしぐさなど「自然にそうしている」のだと思われている場面にも、社会や文化が影響を与えている、だとか。

何かがわかる、説明できるようになることは楽しいが、そこからさらに自身が抱える課題を理解し、

1 例えば荒井和子『先生はアイヌでしょ』（2013北海道出版企画センター）や、土橋芳美『痛みのベンリウク』（2017草風館）には、そうした研究への疑義や批判が述べられている。

解決の糸口が得られることもある。「セクハラ」、「モラハラ」、「レイハラ²」、「ルッキズム³」、「DV」、「毒親⁴」などは、それまで違和感を抱きながら言葉に表しにくかった体験・状況に名前を付け、とらえやすくすることで多くの人を力づけてきた。それによって「個人的なこと」と思われてきた困りごとにも、個人が解決すべき部分と、社会の多数派や強者によって作り出されている部分があることが理解され、社会の問題は社会に差し戻すことができるようになった。

同じように、アイヌが「個人的なこと」と感じてきた困りごとにも、社会の責任において解決すべき課題がある。多くの場合、それは体感的には理解されていることで、それが言葉によって明確になるだけでも、尊厳の回復につながるだろう。他の先住民やマイノリティの研究は、アイヌと重なる環境の中で繰り返された試行錯誤の貴重な記録で、多くのヒントを与えてくれる。

そのなかでも、この特集では「歴史的トラウマ」を取り上げる。抑圧を経験することによってトラウマが生じ、それが放置されることで世代を超えて影響を及ぼすことがある。それが正体不明の喪失感や自己否定感の形をとり、社会生活に問題が生じることもあるという。拙論では、筆者や周囲の人々の体験、聞き書きを引きながら、トラウマ的症状やその原因となる体験が、アイヌとして暮らす環境に共通して見られることを述べる。続いて近藤祉秋、タッチャナ・ツァゲールニクが、この概念の基本的な考え方や成り立ち、課題について詳細に紹介する。窪田幸子はカナダとオーストラリアの先住民政策が「和解」をキーワードとして展開してきた過程を時系列に沿って整理し、歴史的トラウマ概念がそれらの政策に根拠を与える役割を果たしてきたことを述べる。文公輝は、外国人（民族的マイノリティ）に対するヘイトスピーチがトラウマを形成することや、パワハラ防止法がレイシャル・ハラスメントの抑止にも効果を持つことを示しつつ、2020年に開業した民族共生象徴空間「ウポボイ」においてレイシャル・ハラスメントが増加し、新たなトラウマが生み出されていることに警鐘を鳴らしている。

歴史的トラウマや和解、ヒーリングの研究は、アイヌ研究や社会運動、政策決定に関わる人々にとって多くの示唆を与えてくれることと思われる。本特集が、この領域への理解・関心を高める一助となり、今後の研究や政策の充実に資する所があれば幸いである。

2 レイシャル・ハラスメントの略。民族性に起因する差別的待遇のこと。

3 外見至上主義。人の容貌を一つの価値観で評価し、それによってその人自身の評価や接し方を変える態度など。

4 子への依存、過剰な干渉や暴力、育児放棄といった虐待によって、子に悪影響を与える親のこと。

